

SHOW HEY シネマルーム

★★★★

ヤング・ブラッド (THE MUSKETEER)

2001 (平成13年) 11月25日鑑賞

Data

監督: ピーター・ハイアムズ

出演: ジャスティン・チェンバース

／ティム・ロス／ミーナ・ス
パーリ

👁️👁️ みどころ

これはタイトルからはわからないが、デュマの名作「三銃士」の香港風アクション版。羽根付き帽子をかぶり、マントをひるがえしてのカンフー活劇は文句なしに面白い。理屈抜きに、ストレス解消にはもってこい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<カンフー版三銃士の面白さ>

これは「三銃士」の香港風アクション版。「三銃士」とは、言うまでもなくアレクサンドル・デュマ原作の世界名作文学大全集の1つ。アラミス、アトス、ポルトスの三銃士に若き剣士ダルタニアンが加わり、ルイ13世国王に忠誠を誓い、につつき敵リシュリュー枢機卿と戦う、手に汗を握る冒険ドラマだ。

17世紀フランスの、羽根付きの帽子をかぶり、マントをさっそうとひるがえして馬に乗り、たくみに剣を操る銃士の姿は、どんな映画でもカッコイイうえ、苦難の末に最後には正義が勝つ、というストーリーも好まれるためか、再三映画化されている。

最近では、1998年、あのレオナルド・ディカプリオがルイ14世と双子の兄弟フィリップの2役を演じた変形の「三銃士」版、『仮面の男』もある。

しかし、この作品は、今まで映画化されたどの「三銃士」とも趣を異にする、カンフー「三銃士」だ。

イギリス・スペインと結んで、国王ルイ13世の失脚を狙うリシュリュー枢機卿(ステイブン・レイ)の片腕フェブル(ティム・ロス)は、冷血な男だが、剣の腕はピカール。彼は、国王に忠誠を誓う銃士隊を嫌い、銃士であった幼きダルタニアンの父を殺害した。

それから14年。青年となったダルタニアン（ジャスティン・チェンバース）は、銃士隊に加わるべくパリに向かうが、既にパリでは銃士隊はフェブルから迫害され、隊長は投獄されていた。そして、アラミス、アトス、ポルトスの三銃士も、今や酒を飲んでうさばらしに明け暮れていた。

しかし、国王への忠誠と父の復讐を純粹に目指す若きダルタニアンは、1人でも戦おうと動き始める。ダルタニアンを助けるのは、王妃（カトリーヌ・ドヌーブ）のドレスの仕立て係でメイドのフランチェスカ（ミーナ・スノーリ）。若き2人の出会いは結構新鮮。天井裏から、フロに入っているフランチェスカの前に落下したダルタニアンとフランチェスカとの、「ハダカの女を見るのは初めて・・・」というやりとりも、その後のラブラブを予感させる、中世風のいい雰囲気です。

<最高アクションの連続>

こんな二人の恋模様をからめながら物語は展開するが、メインは何といってもアクション。しょっぱな、パリに向かうダルタニアンが酒場で大ケンカ。そのケンカの仕方でも、まず度肝を抜かれる。

活劇アクション場面は、その他に3つある。第1は、変装した王妃とフランチェスカを馬車に乗せて、護衛していくダルタニアンと、これを追うフェブルの部下たちとの格闘シーン。馬車上での格闘もあれば、馬車にしがみついたり、木の枝を使ったり、鉄砲を撃ったり、そりゃ、スピーディで迫力がある。

第2は、銃士隊が王妃らが閉じ込められたお城に突入する場面。これは、ロープを使い、塔を登りながらの格闘シーンだ。ロープを使って塔の上に登り、王妃を助け出そうとするダルタニアン。それを阻止すべく上からロープを使って降りてくるフェブルの部下たち。ロープを錯綜させ合いながらの、チャンバラ劇が堪能できる。

第3は、最後のダルタニアンとフェブルとの、2人の決闘アクション。これは、はしごを多用したインパクトのあるもの。この決闘には、剣の腕だけではなく、体操選手のようなバランス感覚と相手の動きを読む知恵が要求される。

フェブルは、ダルタニアンの父を殺害した時、少年ダルタニアンからの思わぬ反撃によって、左目の視力を失った。このことを知ったフェブルは、ダルタニアンへの復讐心に燃えているから、この2人の決闘はすごい迫力だ。

結果はもちろん、正義の味方ダルタニアンの勝ち。そして、悪の権化のようなフェブルの死亡により、枢機卿も野望を失い、国王の下にフランスは平和を取り戻す。

ダルタニアンは、国王から表彰を受け、フランチェスカと共に新婚旅行へ。めでたし、めでたし。

最初からハッピーエンドがわかっている冒険活劇ドラマは、単純でいい。特に、ストレ

ス解消にはもってこいだ。その上、この『ヤング・ブラッド』の香港風アクションは、とにかく面白い。ジャッキー・チェンのアクションも面白いが、マントをひろがえし、剣を交わしながら、しかも、飛んだり、跳ねたり、回転したりの香港風アクションは、もっと楽しい。

活劇モノがお好きな人には大推薦。

2001（平成13）年11月30日記